

今回は、3月12日に行われました口腔顔面痛エキスパートセミナーについて日本大学歯学部野間 昇先生に、報告していただきます。

## 口腔顔面痛エキスパートセミナー参加報告

日本大学歯学部 口腔診断学講座 野間 昇

口腔顔面痛エキスパートセミナーを、平成29年3月12日(日)に慶應義塾大学病院にて開催した。口腔顔面痛エキスパートセミナーは昨年、大阪で初めて開催された非歯原性歯痛診断実習セミナーアドバンスコースを引き継いだものになり東京での初めての開催になったが、多数の参加者が参集した。セミナーの冒頭、川崎市立井田病院の村岡 渡先生より当セミナーの趣旨について説明の後、セミナーが開始された。



午前の部 司会の村岡 渡先生

午前のは、A~E班の5グループに分かれプレテストから始まり、まず受講者の理解度をチェックした。プレテストのは、典型的三叉神経痛、一次性、二次性頭痛の診査・診断に関する問題、アミトリプチリン、プレガバリンなどの薬物療法に関する問題について出題された。その後、日本大学松戸歯学部の大久保昌和先生から、臨床診断推論実習症例の提示、非歯原性歯痛の診断に必要な頭痛の知識(三叉神経自律神経性頭痛を中心に)について臨床から基礎まで広い範囲に渡り分かりやすく講演頂いた。最初の症例は上顎の歯痛および側頭部の頭痛の症例が提示された。臨床診断推論実習では構造化問診から鑑別診断を挙げ、鑑別診断の確認作業、それに対する検査、問診を行い、鑑別診断の確かさの見直し、最終診断という流れで行われた。症例の概要が示された後、インストラクターが各グループに配置され、グループ間で活発なディスカッションが行われた。臨床推論を進めるうえで鑑別診断に必要な検査を受講者が求め、インストラクターがその結果を提示するという形式ですべてのグループが最終診断まで行った。最初の症例は、三叉神経痛と三叉神経自律神経性頭痛(TACs)の鑑別を要し、さらに筋筋膜痛(TMD)による頭痛の併存も認めた症例で受講者からは難しい症例ではあるが非常に勉強になったという声が多かった。続いて「国際頭痛分類第3版(ICHHD-3β)における Trigeminal Neuralgia」について野間から講義を行った。おもに国際頭痛分類2版(2004年に出版)からICHHD-3β(2013年に出版)で変更になった点、その他の有痛性三叉神経ニューロパチー、脳神経スクリーニングの必要性について講演させていただいた。三叉神経痛第一枝とSUNCTの鑑別診断について述べた後、鑑別が困難な場合はICHHD-3βに準じ、両方の診断をつけるよう解説した。会場から持続性顔面痛を伴う典型的三叉神経痛の診断方法について質問があり、痛みの特徴をしっかりと現病歴で聴取し、診察ごとに病態の経時的変化を確認することが重要であることを受講者に回答した。

午前は、A~E班の5グループに分かれプレテストから始まり、まず受講者の理解度をチェックした。プレテストのは、典型的三叉神経痛、一次性、二次性頭痛の診査・診断に関する問題、アミトリプチリン、プレガバリンなどの薬物療法に関する問題について出題された。その後、日本大学松戸歯学部の大久保昌和先生から、臨床診断推論実習症例の提示、非歯原性歯痛の診断に必要な頭痛の知識(三叉神経自律神経性頭痛を中心に)について臨床から基礎まで広い範囲に渡り分かりやすく講演頂いた。最初の症例は上顎の歯痛および側頭部の頭痛の症例が提示された。臨床



プレテストを熱心に解いている受講者



臨床診断推論実習で症例提示されている大久保昌和先生

午後は村岡先生から、2 症例目の臨床診断推論実習症例として歯痛および痛くて物を咬むことができないという症例が提示された。午前同様、臨床診断推論実習では構造化問診から鑑別診断を挙げ、最終診断という流れで行われた。症例は有痛性三叉神経ニューロパチーの1 つで最終診断に加え、薬物療法の治療計画についても各グループに検討していただいた。患者が複数の既往歴や全身的合併症を有していることから、薬物療法の立案には主治医にコンサルトを行い、薬剤の選択、用法、用量、副作用なども考慮していくことが求められ、より高度な治療計画を学べるよう工夫されていた。

午前に引き続き、野間から「定量感覚検査の解釈と神経障害性疼痛の診断」について解説を行った。定量感覚検査の解釈に関しては、定量感覚検査の必要性、神経障害性疼痛の診断については IASP の診断基準に、外傷性三叉神経ニューロパチーについては ICHD -3B の診断基準に基づき症例を提示しながら解説を行った。次に「神経障害性疼痛の薬物療法の各種ガイドラインの解説」については慶應義塾大学医学部の和嶋浩一先生より講義を頂いた。神経障害性疼痛の薬物療法にあたって、まずは診断能力を養うことが重要であることを述べられ、NICE、カナダ疼痛学会、日本ペインクリニック学会のガイドラインを基に、神経障害性疼痛の薬物療法について説明があった。各薬剤（トリプタノール、リリカ、ガバペンなど）の副作用・使用上の注意点については添付文書を配布され、分かり易く説明いただいた。会場からトリプタノール、リリカの使用法について質問があり、和嶋先生からリリカを増量・減量するポイントについて回答された。総合ディスカッション終了後、ポストテストを行い、本セミナー後の受講者の理解度を再チェックした。多くの受講者がプレテストでできなかった問題もポストテストでは改善されており、口腔顔面痛エキスパートセミナーの有用性を確認できた。



午後の部：薬物療法の解説を行っている和嶋浩一先生

今回のセミナーでは、昨年よりも時間を短縮して内容を凝縮して 10 時から 16 時までとしたため、遠方の先生方にもご参加いただきました。受講者からは「臨床に即した内容を学ぶことができ、頭痛の最新の知識と神経障害性疼痛の薬物療法のプランニングを学ぶことができた」と高評価をいただいた。これに満足せず、講師陣、インストラクターは次年度以降、さらに内容のある口腔顔面痛エキスパートセミナーを企画する予定である。

---

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp